幼児による相互行為の理解と実践についての考察
—祖母と孫の「質問—応答—評価」隣接対の分析から

飯田奈美子（立命館大学　生存学研究センター客員研究員）

1. はじめに

大人と子どもの会話には非対称があり、どのように表れるかについては様々な研究がある。サックスは、子どもが「あのね（You know what?）」という表現を発話の最初に使う現象について考察し、子どもの相互行為上の戦略を発見している。子どもに「あのね」と聞かれたら、通常大人は、「なあに？」と答えることで、子どもに再度発言権を与えることになり、これは、子どもは大人に比べて発言権が制限されているために、ある種の相互行為戦略が必要になるからなされているとサックスは述べる（山田 2010:61-62）。また、スパイアーは、大人と子供の相互行為の一般的特徴として、子どもは大人と比較して会話に参加する権利が極めて制限されているために、①大人の注意が子どもに向けられている状況においては、子どもは言うべきことを大人に与えられたり、子どもが言ったことが大人によってとりあげられ、再度言い直され強化されたりすることがある(例えば「こんにちは、は？」)。それに対して、②複数の大人の協働活動が支配的な状況（例えば主婦の立ち話）では、子どもは大人たちの会話に割り込んでいくために特別な相互行為戦略（例えば靴が片方なくなったなど緊急性の高い質問や大人の助けを必要とすることを訴えるなど）を必要とする（Speier 1973）。これらの先行研究から、子どもが大人の支配的文化によって制約されていることを認めながらも、それに対抗する子どもの能力や戦略も明らかにされている。

このような相互行為上の戦略は、ただ大人と子どもを区別するだけのものとして存在するのではない。子どもは、大人とのコミュニケーションにおいて、さまざまな相互行為上の戦略を行使しながら、「社会」を理解し、社会でのふるまいを身に付けていく。いわゆる「社会化」が行われていくのである。

エスノメソドロジーにおいて「社会化」は、子どもが「発達」する中で、どのように大人に到達するのかという心理学的発達論に沿った見方ではなく、子どもが時間の経過の中でどのように大人と世界を共有するようになるのかということとして再提示されるものである（山田 2010:65）。エスノメソドロジーの創始者である、ガーフィンケルは、子どもが大人になるということは、世界の変更の一つとして考えており、それは、大人という「能力ある社会成員」の常識的な世界の見方を子どもが「進んで従う」ようになることによって達成されるものであると述べる（山田 2010:66）。これらのエスノメソドロジーの視点は、子どもの「社会化」について、それは、規範的な道筋があり、子どもがその道筋の階

段を順序良く上っていくことではなく、日常世界のメンバーである大人が子どもを意味ある存在と捉え語りかけることで、子どもが大人の日常世界を相対化し、身振りや言葉を協同的な達成物として習得することができるものとしている。そして、このような「社会化」を行っていくには、大人や子ども同士の相互行為が何よりも重要になり、相互行為を行うことで、文化的推論を身に付けることができ、それにより子どもの「社会化」がなされるのである。とくに、言語発達過程にある幼児は、身近な大人とのやりとりの中で生き、そのやりとりによって、相互行為を理解し、より適切な行為を導き出したり、大人との理解の齟齬を解決したりしている。その過程を具体的状況の中で、相互行為の当事者が何を志向し、発話行為をどのように捉え積み重ねているかを厳密に捉えることは、子どもの社会化の過程の解明に有用であると考える。

そこで、以下では、子どもの「社会化」の要素として重要な文化的推論を、言語形式運用の能力が十分に発達していない 2 歳児がいかにして身に付け、日常世界の秩序をいかに習得しているかについて考察していく。

2. トランスクリプトの条件と分析手法

引用データ：祖母と孫の会話場面

引用時間：01:10—03:46

登場人物：祖母（70 歳代）、孫（2 歳）、母（ビデオ撮影担当者であるため，画面内には映っておらず声のみ収録されている　声）

場面：祖母が孫に本（フェルトで作るおもちゃ）を見せながら、食べ物の名前を聞いていく場面。

トランスクリプト記号凡例

[　　発話の重なりの始まる点

（.）　0.2 秒以下の短い沈黙

（数字）　沈黙・間合い

下線　　強い音

、　　発話が続くイントネーション

。　　発話が終わるイントネーション

（）　　聞き取り困難発音

＞＜　　早く話す

(())　　著者コメント

：　　音の伸ばし。コロンの数は引き延ばしの総体的な長さに対応している。

ｈ　　呼気音。ｈの数はそれぞれの音の総体的な長さに対応している。

B→本を見ている、C→孫を見ている

引用データは、祖母（70 歳代）と孫（2 歳：女児）が本を見ながら会話を行う場面で母がビデオ撮影を行っている（母の声だけ一部収録されている）。本は、フェルトでお菓子や食べ物を作る作り方が写真付きで掲載されている本である（下記写真）。その本の中にある、お弁当のフェルトのおもちゃを祖母は以前に製作し、孫にプレゼントしていた。祖母と孫は写真をみながら、食べ物の名前を聞き、答える、その回答を評価するというやり取りを行っている。このやりとりから、「質問―応答―評価」の隣接対を分析することにより、連鎖構造における、大人と子どもの非対称性を明らかにするとともに、連鎖構造において、会話の転換、終結がどのように秩序化されているかを明らかにしていくことで、子どもの社会化の過程を考察していく。本稿では、社会学の中のエスノメソドロジーを基盤とした会話分析を用いて分析を行っていく。

フェルトでつくるおもちゃの写真

写真 1：ハンバーグランチ（左）
左上グレーの円形がリングチョコレート

写真 2：ランチボックス（右）
黒色の丸いものが太巻き

3. 分析

3-1.「質問―応答―評価」の隣接対

本稿で取り上げる抜粋では、祖母が本（フェルトのおもちゃの写真）を見ながら、おもちゃの食べ物の名前を孫に質問するという発話連鎖が行われている。このため、基本的にこのデータの会話は、「質問―応答―評価」の隣接対でできている。祖母の質問は、孫が食べ物の名前を知っているか確認する、もしくは、名前を教えるというためのものであり、祖母があらかじめ知っている知識について、孫に質問をしている。そのため、孫の回答に対して、それが、あっているかどうかの「評価」が孫の回答の後すぐに行われている（例：＃01～08[1]）。孫が間違った回答をした場合に祖母は訂正を行うのだが、訂正を行うまでに少しの時間がかかっている。例えば 26 行目では、孫が間違った回答をした時に 0.4 秒の沈黙の後、祖母が正しい名前を発している。これは、同意が非同意よりも優先されるという優先構造によるものであると考えられる。

【抜粋１】

01　　BBBBBBBBBBBBBCCCCCCCC
02 祖母：あっこれは何だろう？
03　　（(本を持ちながら、指さしてきく)）
04　　BBBBBBBBBBBBBB
05 孫：えっとね、ハンバーグ！
06　（(体を横に揺らす)）
07　　BBBBBBBBBBB　CCCC
08 祖母：ハンバーグ、そう、これは？
09
10　BBBBBBBBBBBBB
11 孫；えっとね::、とまと！
12　（(体を横に揺らせている)）
13　　BBBBCCCCCCCCCCCCCCCCCC
14 祖母：トマト。いちご？どっち？トマト↑これ？
15
16　　BBBBBBB
17 孫：＞トマト＜！
18　　（(体の揺れをとめて、体を動かしながらいう)）
19　　BBBBBBBBBBBBBBCCC
20 祖母：え:::そうなんや:。これは？
21
22　　BBBBBBBBBBBBBBB
23 孫：えっと:::、(.) ドーナッツ！
24　（(体を少し横に揺らす)）
25　　BBBBCCCCC
26 祖母：(0.4) レタス。
27
28 BBBBBB
29 孫：レタス
30
31　　BBBBBBBBBBBBCCCBBBBBBBBBCCC
32 祖母：うんレタス。これなんか、なんだろうね。みたことある？
33
34　BBBB

35 孫：うん
36　((うなずく))
37　　BBBBBBBBBBBCCCC
38 祖母：あ::、食べたことある？
39
40　BBBB
41 孫：うん
42　((うなずく))
43
44 祖母：なに？これ？
45
46　BBBBBGGG
47 孫：ドーナツ（((ききとれないくらい小さな声で))
48
49　　CCCCCCCCCC
50 祖母：チョコレート？
51
52　BBBBBBBBBB
53 孫：チョコ―トない。
54　((首を横にふる))
55　　CCCCCC
56 祖母：ちがう？
57
58　BBBBB
59 孫：ドーナツ
60
61　　BBBBBBB　CCCCCCCC
62 祖母：うん。(1 秒）これはなに？
63
64 BBBBBBBBBBBBBBBBBBBB
65 孫：えっとね:::。(3 秒）ハンバーグ
66　　((体を上下に動かしていう))
67　　BBBBBBBBBBBBBBBBBBCCCCC
68 祖母：そうだ、そうだ。よかった、これは？

祖母は孫が回答を知らないであろうとする食べ物に対しては、すぐに質問を行うのでは

なく、先行連鎖を用いて、孫に質問する食べ物について「みたことある？」「食べたことある？」と尋ねている（＃32～44）。質問されていたのは、丸い形をしたリングチョコで孫はそれを「ある」と答えている。孫は、リングチョコレートをドーナツだと思い込んでいて、ドーナツは食べたことも見たこともあるものなので、祖母の質問にもうなずいて答えたのだった（＃36，41）。というのも、祖母はその前の質問で、孫が間違った回答をした際に（＃23）、リングチョコをドーナツだと思いこんでいることを認識していたので、このように先行連鎖を用いて質問を行い、もし知らないと孫が答えたら正しい回答を教える発話ターンに持って行こうとしたのだったのだが、孫は知っていると回答をしたことにより、祖母の戦略は失敗したのだった。

しかし、祖母のそのような確認を行う発話連鎖に対して、孫は回答を述べる際、聞き取れないくらいの小さな声で「ドーナツ（＃47）」と述べるのであった。これは、孫は、質問形式の変化について気づいており、自分が回答しようとしている回答が適切ではないと孫自身が気づいて、自信のない返答方式になったといえる。このことから、「質問―応答―評価」の隣接対において、質問の仕方が変化することで、応答者が回答しようとしている回答が適切ではないと感じるという相互行為をわずか 2 歳の子どもであっても十分に取得できていることがわかる。もう少し詳細にこの局面を分析していこう。

まず、孫は「質問―応答―評価」の隣接対を基本とする連鎖構造が形成されていることを理解している。この会話がされている場所は、祖母の家であり、教室などの制度的場面ではない。したがって、この会話は制度的会話ではなく、日常会話の一部として行われた会話である。しかし、この会話は母であるビデオ撮影者が祖母に依頼をして始めてもらった会話であり、自然発生的ではなく、ある意図（孫と祖母の相互行為過程をビデオ撮影する）を目的として作られた場面設定であった。孫は、母が会話場面をビデオ撮影していること、その間、祖母は母を一度も見ずに孫に話しかけていること、祖母から「質問―応答―評価」の隣接対を基本とする相互行為が繰り返しされることによって、普段の日常会話ではないことを読み取ることができ、何らかの意図で始められた即興的な場面設定ということを理解していったのであった。

そして、32 行目において先行連鎖が用いられたことにより、定式化した隣接対ではない異なったパターンが出てきたことを認識する。そのことにより、孫は自分が回答しようとする回答が適切ではないことがわかり、ききとれないくらいの小さな声で応答するのであった。自分の発言が適切でないと認識できるのは、もともと定式化された発話構造を理解しており、それとは異なった隣接対が出てきたことにより、適切でないと認識できたのである。

このように、言語形式運用の能力が十分に発達していない、2 歳児においても、相互行為において場面の設定を理解し、その場面で行われる発話構造を理解して、相互行為を行っていることがこの発話連鎖によって呈示されているといえる。

そして、孫が聞き取れないくらい小さな声で「ドーナツ（＃47)」と答えた後、祖母は「チョコレート？」と発言し、孫に正しい回答を教えている。しかし、孫は「チョコレートない（＃53)」と答え否定するのである。このやり取りにおいて、孫は、祖母から丸い形をしたものはチョコレートであると教えられるが、自分が知っているチョコレートとその丸い形をしたものは異なっており、自分が知っているチョコレート（おそらくは四角い形をしたチョコレート）は、ここにはないと思い「チョコレートない（＃53)」と発言をし、祖母の教える回答を拒否した。

その後、祖母が「ちがう？（＃56)」と聞くと、孫は、今度は、はっきりと「ドーナツ」と答えたのだった。「チョコレート」が出てきたことにより、質問されたものが「チョコレート」と比較することができるようになり、改めて「チョコレート」とは違うことを確信し、「チョコレートない（＃53)」、「ドーナツ（＃59)」と答えたのであった。

その後、間違った回答をした孫に対して、祖母は「うん」と答えて訂正をせず（もちろん評価もせずに）に、1 秒間をあけて次の質問を行っている（＃62)。そのため、次の質問の回答（ハンバーグ）を孫は知っているのにも関わらず、返答に 3 秒の時間がかかっている（＃65)。これは、先の発話ターンが「質問―応答―評価」の形式になっていないことから、孫は、定式化された連鎖構造と異なると感じ、質問の返答に時間がかかったのだった。

以上のことから、孫は、意図的に開始された場面設定を理解し、その中で展開される「質問―応答―評価」の形式は定式化された発話パターンであると理解し、そうでない発話連鎖が出現したときに、自分の返答しようとしている回答が適切ではないかもしれないという認識を表示する方法（聞き取れないくらいの小さな声、回答までに 3 秒かかる）を用いて、その場の適切性を表示していたことがわかる。

また、次節では、孫は祖母の認識が間違いであることを指摘し、修正をするという高度な相互行為を行っていることも明らかにする。

3-2.　第三位置の修復

【抜粋２】

82　　BBBBBBBBBBBBBCCCCCCCCCC

83 祖母：えー、あっ！これおばあちゃん作ったよね。これなに？

84

85　　BBBBB

86 孫：かちゃぼ（(小さな声で)）

86　（(祖母のほうに寄り添う)）

87　　CCCCCCCCCCCCCCC

88 祖母：これなんだったっけ？

89
90　　BBBBBB
91 孫：かちゃぼ
92
93　　CCCCCCC
94 祖母：ちゃかぼ？
95
96　　BBBBBB
97 孫：かちゃぼ
98
99　　BBBBB　　CCCCCCC
100 祖母：かぼちゃ　そう。これは？
101

写真 3：＃86 祖母に寄り添う孫

83 行目で、「これおばあちゃんつくったよね、これなに？」と祖母が質問した。これは写真 2 のランチボックスの中のかぼちゃの名前を問うている。これに対して、孫は小さな声で「かちゃぼ（＃86）」と答える。祖母は孫の発音がまちがっていることから、もう一度「これなんだっけ？（＃88）」と質問をする。それに対して孫は、もう一度「かちゃぼ」と答える。そして、その答えに対して祖母は「ちゃかぼ？（＃94）」と問い直している。祖母は、孫の発音が間違っていることから、それを訂正させようと孫の発音を繰り返そうとしたのだが、孫の発音をなぞらえようとする祖母の発音が間違っていたことから、孫はそれを訂正するかのごとく、97 行目で「かちゃぼ」と答えているのである。

孫は、最初の 86 行目の段階では、「かちゃぼ」を小さな声で答えており、自らの発音が正しくないという認識を示している。それに対して 97 行目の「かちゃぼ」は、はっきりと発音し、祖母の孫の発音をなぞらえようとする発音がまちがっていることを指摘するための回答になっている。この二つの隣接対は同じ回答内容となっていても、定式化された連鎖構造の「質問―応答―評価」とそれとは異なる「確認―訂正」の二つの連鎖構造からなりたっているといえる。

さらに、この発話ターンは会話分析における修復の連鎖の捉え方を説明する概念である「第三位置の修復」（Schegloff 1992）でもあるといえる。「第三位置の修復」は、相互行為の参加者が互いの理解のトラブルを公然化するために、修復することができる発話の位置において、自分の発話についての相手の理解を理解し、誤解が生じている場合には、適切な理解を導くべく自分のふるまいを修復することである（高木 2011:112）。自分の発話についての相手の理解が誤っていることを公然化する機会は、自分の発話に対する相手の反応を聞いた後、すなわち、自分の発話から数えて三番目の位置にあるターンになる。最初のターンが適切に解釈されていないことが、第二位置のターンにおいて示された場合は、誤解された最初のターンから三つ目の位置にあるターンにおいて、その問題を解決すべく

先の自分のターンをやり直す(repair)ことができるのである。

この場合は、91 行目の孫の「かちゃぼ」の発話は「第一のターン」となり、また、次の祖母による「ちゃかぼ？」という発話は、最初のターンが適切に解釈されなかったことが公然化される「第二位置のターン」になる。そして、孫による 97 行目の「かちゃぼ」は、第二のターンを修復する「第三位置の修復」となるといえる。

高木智世は、幼児における第三位置の修復が行われる連鎖構造を分析する中で、レビンソンの示唆（Levinson2006）を引用し、言語形式の運用能力が十分に発達していない幼児が、間主観性の揺らぎを整序する具体的手続きの一つである第三位置の修復を行うことができるのは、相互行為能力が言語形式を操作する能力に先行することを示す可能性があり、相互行為能力が基盤となって言語発達が可能になっているのではないかという知見への期待を述べている（高木 2011:113）。

本研究においては、相互行為能力が言語形式を操作する能力に先行することを実証するものではないが、高木の研究と同様に、2 歳児であっても第三位置の修復を行い、認識の誤りを認知し、修復していく相互行為を十分に行うことを立証するものとなっているといえる。

3-3. 祖母が孫以外に話しかける行為

【抜粋３】

129　　CCCCCCCCCCCCCCCCCCCC

130 祖母：えっシュウマイだね、これは？

131

132　　BBBB

133 孫：太巻き

134

135　　BBBBBBBBBBBBBBBBBBBB

136 祖母：太巻き？hhh 太巻きっていうの？

137　　((祖母が孫をみる))

138 母：そう、太巻きっていう。((孫は母をみる))

139　　BBBBBBBBBBBBBBBBBBBB

140 祖母：そうなの。巻きずしって言わないんだね。太巻きっていうんだね。

141　　BBBBBBBBBBBBBBCCCCC

142 祖母：これ　これ　かわいいの何だろう？

143

144　　BBBBBBB

145 孫：トマト（小さな声で）

146　　((手を口に当ててすこししゃがむ))

写真 4：＃138 母が発話に参加し孫が母を見る。

この抜粋は、133 行目で孫が「太巻き」と回答したことに、祖母が違和感を感じ母に対して話しかけている場面である。祖母は普段「太巻き」という表現を用いず「巻きずし」と呼んでいるので、孫がそのように発言したことにびっくりしている。そして、それについて「太巻き？hhh 太巻きっていうの？（＃136）」と発言している。

祖母のこの発言は、通常とは異なる表現をしている孫に対して自己訂正の促しをしているものであるのだが、孫は「太巻き」を通常使っており、「巻きずし」という表現自体を知らないため、自己訂正を行うことができない、そのため、それを理解している母が、祖母の要請に答えていると考えられる。

しかし、その際、祖母は母の方を見ていない。発話ターンの変更において、現在の話し手は、次の発話を行う人を見る、もしくは名指しするという行為によって、次の発話者を決定することができる（山崎 2004:29）。しかし、この時祖母は孫を見ていた。祖母は、「太巻き？」と言ったあとに笑いながら、「太巻きっていうの？」と発話している。笑うことでターン表示を行っており、しかも、笑うという行為が、それまで孫に対して行っていた「質問―応答―評価」の相互行為とは異なる行為が始まることを表示するものとなっている。そのため、現在の発話者（祖母）は、母を見ず、また名指しもしていないが、母がこの場面の発言権を移譲した/されたと祖母も母も認識している。そして、その発話に対し、母が回答をしているのである。さらに注目すべきは、孫もそれが自分に向けての発話ではないと理解して、発言をしていないのである。

この局面についてもう少し詳細に分析を行っていこう。この会話が、自然発生した会話ではなく、意図的に開始され、設定された場面であり、そのことを孫も意識をして場面に参与していることを述べた。したがって、この「質問―応答―評価」の相互行為が行われる場面は、ゴフマンの提唱した概念、「表－局域（front region）」(Goffman 1959=1974)であるといえる。「表－局域」とは、特定のパフォーマンスを準拠点とした場合、そのパフォーマンスが行われる場所を表す(p.125)もので、パフォーマーとオーディエンスが存在する場である。ここでは、パフォーマンスは、祖母と孫にあたり、オーディエンスは母（ビデオ撮影者）になる。それに対して、「裏―局域」とは、特定のパフォーマンスに関して、該パフォーマンスが人に抱かせた印象が事実上意識的に否定されている場所と定義される(p.131)。「表－局域」はある特定のパフォーマンスが現に進行中あるいは進行するはずの場面をさし、それに対し「裏―局域」は該パフォーマンスに関係がありながらそれがつくりだしている見せかけとは矛盾している行為の生ずる場面である。祖母と孫の「質問―応答―評価」の発話連鎖が続く場面は「表－局域」となり、祖母が、孫の発言に対しての意見を母にいう発話連鎖となり、本筋とは異なる「裏―局域」として、呈示された局面であるといえる。このような場面の変更が瞬時に行われているにもかかわらず、その違いを 2 歳の子供は理解し、孫も笑いの後の発話が、「質問―応答―評価」ではなく、母に対して発せられた「裏－局域」であると理解し、祖母と母の会話には関与しないという判断をしているのであった。

3-4.　終結部

【抜粋４】

180　BBBBBBBCCCCCCCCCBBBBBB

181 祖母：えびかな。(.) フライドチキンだって。ほら、(.) ね。

182

183　BBBBBBBBB

184　　((どんどんならすのをやめて祖母のそばにいく))

185 孫：いっぱいある。

186　　((目をかく))

187　　BBBBBBBBBBBBBBBCCCCCC

188 祖母：いっぱいあるね。(.) これは？

189

190　BBBBBB

191 孫：にんじん::

192　　((目をかく))

193　BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB

194 祖母：にんじんさんだね::。そう。わ:::たくさんね。〇〇ちゃん、これお弁当つくったよね、

195

196　BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB

197 祖母：おばあちゃん、うん (.) カボチャもつくったし、うん (.) ブロッコリーも作ったし。

198 ((孫が本をもつ))

199　　BBBBBBB　　BBBBB

200 孫：おーしまい。(.) つぎね。

(孫本を閉じる)

202　　BBBBBBBBBBBBBBBBBB

203 祖母：おしまい。これは。おいしそうだね。

204 ((孫本を下に落とす))

終結部（closing section）とは、終結の隣接対に最終的に到達するまでに、終結部と呼べる会話がくることである。終結部とは、最終的に終結の隣接対をつくりだす準備を事前に行うための発話連鎖である（山田 1999:21）。この場面の終結は、孫が「おーしまい。(.) つぎね。」と言って、本を下に落として終わりになっているが、その前から終結の隣接対をつくりだす準備が行われている。

祖母と孫は「質問—応答—評価」のやりとりを行っていたが、だんだん孫が疲れてきて（もしくは飽きてきて）祖母のそばにきて目をこするという行為を行うようになった（＃184、186）。それを見た祖母は、終結に向かう準備として、「質問—応答—評価」のやり取りのまとめを行っていく（＃194，197）。

「〇〇ちゃん、これお弁当つくったよね、おばあちゃん、うん（.）カボチャもつくったし、うん（.）ブロッコリーも作ったし。」と発言して、今回見た本の写真は以前にプレゼントしたフェルトのおもちゃのものであることを伝えた。これは、祖母が一番伝えたかったことである。これは、「会話の全体的特徴づけ」と呼ばれるもので、今まで話されていた会話がどのような性格をもつものなのかを特徴づけるため、会話を開始した理由を述べたりするものである（山田 1999:21）．祖母は自分がつくったフェルトのおもちゃについての思いを孫と共有したいと思い、また「質問—応答—評価」のやりとりを行うことでそれを共有するという相互行為を行い、このように発言をしてやりとりをしめくくった。それに対して、孫も、今までなされていた「質問—応答—評価」のやり取りではない、まとめが発話されていることを聞き、終結がされていると理解し「おーしまい。(.）つぎね。（＃200）」と発言して本を閉じるという行為をしている。そして、孫が本を閉じるという行為をしても、祖母は「おしまい。これは。おいしそうだね。（＃203）」とまだ会話を続けられる発話ターンを行っている。この祖母の発話は、会話が円滑に終了させるためには、お互いにそれ以上「言いたいこと/いうべきこと（mentionable）」がないということを確認しあいながら、もしまた「言いたいこと/言うべきこと」があるのならそれをいう機会を与え合いながら終了にいたる（高木 2005）という終結部の秩序に沿ったものであるといえる。祖母は、会話者のどちらかが一方的に会話を打ち切るという行為が、相互行為上適切ではなく、孫に対してでも、さらに「言いたいこと/言うべきこと」がないかを確認する機会を与えている。しかし、孫は、それには応答せず、本を下に落とすという強硬手段で、会話の終了をさせている。

孫には、まだ 203 行目の祖母の相互行為上の適切性の意味を理解していないかもしれない。しかし、孫は、この短い祖母との相互行為の中だけでも、さまざまな相互行為上の適切性を学び、さまざまな文化的推論を身につけていくことができたのではないかと考える。子どもの社会化は、このように大人との相互行為のなかで適切な活動をしたり、不適切な活動をしたりすることで、大人からの訂正や評価をうけることによって、文化の慣習を習得していくという日常的実践によって達成されるものであるといえる。

4. まとめ

本研究では、祖母と孫のやりとりを会話分析を用いて分析を行い、子どもの「社会化」の要素として重要な文化的推論を、言語形式運用の能力が十分に発達していない 2 歳児がいかにして身に付け、日常世界の秩序をいかに習得しているかについて考察していった。

以下では、本稿で分析をした結果をまとめる。

まず、孫は、やりとりが行われている場面を正確に理解をしていることがわかった。祖母と孫のこの会話は、自然発生的に開始されたものではなく、意図的に設定された場面であり、孫はそのような説明がなくても、相互行為の中からそれを理解をして場面に参与しているのだった。それは、祖母がビデオ撮影者の母に話しかけるという行為を行うことで、「表－局域」とは異なる「裏―局域」が出現したときの孫の対応を見ることでも明らかである。孫は、「質問―応答―評価」のやりとりが表の参与者で行われることを理解しており、定式化されていないやり取り行われると、それは裏の舞台に変更されたことを瞬時に認識し、その相互行為には関与しないという判断をおこなっていたのであった。

そして、孫は発話構造の形式についても十分理解していたのだった。孫は、祖母との会話では、「質問―応答―評価」で組織化された発話パターンを定式化された連鎖構造であると理解し、そうではない発話連鎖がなされた場合に、自分の返答しようとしている回答が適切ではないかもしれないという認識を表示する方法（聞き取れないくらいの小さな声、回答までに 3 秒かかる）を用いて、その場の適切性を表示していたのだった。また、孫は言語形式の運用能力が十分に発達していないにもかかわらず、「第三位置の修復」を行い、祖母の認識の誤りを認知し、それを修復していく相互行為を十分に行っていることも明らかになった。さらに、終結部においても、「会話の全体的特徴づけ」とされる終結のまとめが用いられていることを認識し、会話が終結に向かっていることを理解していたのであった。

言語形式の運用の能力が十分に発達していない幼児は、大人と同様に言語的資源を駆使して相互行為を達成しているわけではない、しかしながら、わずか 2 歳の子供であっても、身体の動きと発話を適切かつ緻密に連動させることによって、相互行為を理解し、より適切な行為を導き出したり、大人との理解の齟齬を解決したりしているのであった。

このような大人と子どもの相互行為は、それ自体が子どもにとっては、さまざまな人との相互行為が行えるようになるための学びの場であるとともに、日常世界を生きていくための実践の場ともなっている。社会の中でどのように大人や子ども同士と関わり、生きていくかについて、子どもは日々のやりとりの中から学んでいるのであり、その日常的経験を緻密に捉えることは、子どもの社会化の経験的研究の発展に貢献できると考える。

---

[1] ＃は行を表す。

【引用文献】

Garfinkel, H 1967 *Studies in Ethnomethodology,* Englewood Cliffs: Prentice Hall.

Goffman, Erving, 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company, Inc. ＝1974, 石黒毅 訳『行為と演技――日常生活における自己呈示』, 誠信書房

Levinson, Stephen 2006 On the human ”interaction engine.” In Enfield, Nick J.& Levinson, Stephen(eds.),*Roots of human sociality.*39-66.New York :Berg.

Schegloff, Emanuel.1992 Repair after next turn :The last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation. American Journal of Sociology,97,1295-1345.

Speier, M.1973 *How to Observe face-to-face Communication: A Sociological Introduction,*Pacific Plisades: Goodyear.

高木智世 2005,「社会的実践としての日常会話：電話会話の終了に関わるプラクティスを例に」『論叢現代文化・公共政策』,1,143-175.

高木智世 2011,「幼児と養育者の相互行為における間主観性の整序作業－修復連鎖にみる発話・身体・道具の重層的組織―」『社会言語科学』第 14 巻第 1 号 110-125.

山田富秋 1999「会話分析を始めよう」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社,1-35.

山田富秋 2010「子ども/大人であること」串田秀也・好井裕明編『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社,58-75.

山崎敬一 2004 「エスノメソドロジーの方法」,山崎敬一編,『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣 15-32.

＊＊

【編集後記】

『現象と秩序』第 7 号をお届けします．巻頭の特集『多文化異文化交流と学園都市的食生活』は，神戸市看護大学教員，神戸市外国語大学教員，および，神戸市外国語大学消費生活協同組合職員が共同で申請した研究経費に基づいてなされた研究をベースにしたものです．高齢化が進行しつつある，神戸市郊外のニュータウンという事情や，留学生が比較的多い外語大と，一人もいない看護大という事情に基づいた研究がなされていますが，その一方で，全国の地域や大学と同時代的状況を共有している面もあります．そういう眼で見て頂ければ幸いです．

特集以外の論説では，まず，飯田論文は、幼児に関するエスノメソドロジー・会話分析研究の成果です．幼児と母と祖母の 3 者間で，カテゴリーに関する理解の摺り合わせが複雑に高度に達成されていることが明白にわかる論考になっています．

桃井論文も，画像を大量に用いた授業研究になっています．また，アクティブ・ラーニング研究にもなっていて，その点では，特集の第一論文とも関連しています．

篠島ほか論文は，ALS 療養者のさまざまな工夫を扱った論文です．足の指で絵を描くにあたって，かつて建築関係の仕事で使っていた製図ソフトが流用されています．経路依存性研究としての質を持っているように思われます．

藤野ほか論文は，女子車椅子バスケットボール研究が扱われています．関西に 1 チームしか女子チームがない，ということで，通常は強化の困難が帰結されると思われるのに，インタビューによれば，国際大会準備として男子チームに混じって練習することが有効だ，という話になっています．一種の思わざる効果研究として成立していると思います．

次号には、特集：『社会学を基盤にした（ソーシャルワーク系）新専門職の可能性』が掲載される見込みです．ご期待ください．　(Y.K.)

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2017 年度）

編集委員：樫田美雄(神戸市看護大学)・中塚朋子(就実大学)・堀田裕子(愛知学泉大学)

編集幹事：坂根杏奈　(神戸市外国語大学)・平田菜津子　(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力：村中淑子　(桃山学院大学)

『現象と秩序』第 7 号

2017 年　10 月 31 日発行

発行所　〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室

電話・FAX）078-794-8074（樫田研）,e-mail:　kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN　：2188-9848

ONLINE ISSN　：2188-9856

http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html